アクアリウムの鯨

谷村志穂

角川文庫

アクアリウムの鯨（くじら）

谷村志穂（たにむらしほ）

角川文庫　9781

平成七年九月二十五日　初版発行

発行者——角川歴彦
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話　編集部（〇三）三八一七—八四五一
営業部（〇三）三八一七—八五二一
〒一〇二　振替〇〇一三〇—九—一九五二〇八

印刷所——新興印刷　製本所——本間製本
装幀者——杉浦康平

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

©Printed in Japan

た 29-4　ISBN4-04-183204-7　C0193

アラスカの鯨

谷村志穂

角川文庫 9781

[aquarium] *n.* 1観賞などの目的のため、魚類や水生動物などを飼育する水槽　2水族館

近い将来必ず、潜在する能力を使い、他の動物たちが水中に潜るのと同じように、あるいはそれ以上に深く、長く、海に潜ることが可能になるに違いないと私は信じている。

――水深一〇五メートルの潜水記録保持者／J・メイヨール

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

一章　CABIN／八角形のガラスの部屋で　七
二章　ISLAND／孤島での七日間　六九
三章　WHALE／あなたの小さな魚は　一三七
単行本版あとがき　一八〇
文庫版あとがき　一八二
解　題――処女小説から最新作まで　一八五

一章 CABIN／八角形のガラスの部屋で

1

自転車のペダルを、ゆっくり踏み下ろす。

都内とはいえこの辺りには、まだ野生と呼べるものがたくさん残っていた。特に、大学へ向かうこの小さな路が、私はとても気に入っている。

平坦(へいたん)な土地を緩やかに曲がりながら国道へ続いている砂利路は、両脇をびっしりと繁茂した植物で覆(おお)われている。下層にはシダが、中層にはカエデやトチが、そしてさらに高いところにはホオノキやアオハダの大木が、旧知の友人たちのように空間を分け合っている。

初夏、この季節になると、葉が、枝が、それぞれに勢いよく空に伸びだし樹液の匂いを放ち、私は息苦しさを覚えることがある。

シダのくさむらの向こうから、栗色の縮れ毛をした犬が鼻先をひくつかせながら顔を出した。車輪が転がる音に驚いたのか、小さな唸(うな)り声をひとつ上げ、丸まった尾を見せ、くさむらへ戻っていった。

私は、ペダルを漕(こ)ぐ足に少し力を込める。

生成りのコットンのスカートの中に、ふんわりと風が入ってくる。大きな木蓮の花の花弁のように、裾が丸く膨らむ。二本の脚は花心のようだ。花心が懸命にペダルを漕いでいる図が浮かぶ。花びらの中で蠢いている花心。喘いでいるのだろうか。

自転車の前のバスケットが、収まり悪そうに揺れた。

重たい木枠の、教職員玄関の扉を押し開ける。いつものように、床に差し込んである新聞を手に取り、校舎の中に入った。

ゆっくりとした足取りで、私は階段を上り始める。

古い建物が並ぶキャンパスの中でも、農学部の校舎は群を抜いて古い感じを与える。厚い木の床は、もう元の色合いが想像もつかないほど黒く沈み、歩くとかすかに軋む音をたてた。大理石の手摺は外がどんなに暑かろうと冷えており、手摺をたどりながら階段を四階まで上るころにはすっかり目が覚める。

〈応用動物学教室第一実験室〉

墨字の木札が掛かった研究室は、四階を上りきってから、さらに細い階段を十八段上ってたどり着くペントハウスにある。小さな扉を開くと、校舎の薄暗さとは対照的に、自然光が差し込むガラス天井の小部屋が現れる。小部屋の中央にはガラスの小箱のような、八

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

角形の空間があった。晴れている日にはいつでも光が反射し拡散し、曇っている日は柔らかな光に包まれているその小さな空間は、キャビンと呼ばれている。

キャビンの入り口で膝下までの丈の白衣に着替え、鏡の前でウェーブのない肩までの髪をひとつに結わえる。黒目がちの瞳と、見慣れた頬の輪郭。うすく筆で描いたような、そのせいで少し冷淡な感じに見えてしまいそうな口元。いつも通りの決まった時間、同じように鏡に向かい、表情を確認する自分。鏡に映った体温のない姿。最近の私は少し苛立っているのかもしれない、と思う。そして私は、苛立ちの原因から目をそむけようとしているのだ。

作業の手順も分刻みに決まっている。まず冷蔵庫から、すでに水洗いしてラップにくるんである桑の葉を取り出す。ビニールの手袋をして再び水洗いした桑の葉を、バットと呼ばれるホーロー製の皿にのせ、キャビンの中へ入っていく。

ホーローの皿には、鉄さびがいくつも浮き出している。白い皿に拡がる赤茶色の鉄さびは、ときに奇妙な姿となって見えることがあった。

サボテンの花、金魚、洋なし……、独りの部屋で声に出してみては、そんな他愛のないことで一日の変化をつけようとする自分を空しく感じてしまう。

キャビンの中は二十四時間サーモスタットが稼働しており、常に摂氏三十度に保たれて

いる。それにしてもこの中は暑いな、と私は思う。入って五分もすればすぐに身体全体に小さな汗の粒が吹き出してくるのを感じる。ガラスの仕切り板に映してみる顔はいつも湯上がりのように上気していて、だから私は髪をブローすることも化粧をすることもあきらめている。この仕事をはじめてすぐ決めたことだった。

ここで飼育しているのは、動物学科の研究対象動物の中では最も小型のダニだ。植物の葉につき、その養分を吸収しながら生息する植物性のダニが中心だった。農家からは憎まれるばかりの、不運な生き物である。ダニ対策の農薬もたくさん出てはいるが、近頃では農薬に抵抗性の遺伝子をもった子孫が出現し始めた。

足音が聞こえたような気がして、私はガラス越しに後ろを振り返った。研究室の戸口には、大学院生の田原が開いたままのドアにもたれて立っていた。田原はメタル・フレームの眼鏡をかけ、ボタンをせずに無造作に白衣をはおっている。一瞬目が合ったが、私は作業を続けた。

腕時計で時刻を確かめる。八時三十分だった。仲本がやって来るにはまだ少し間があった。困ったな、と思う。

田原は私の前に回り、右手を握るとかるくガラスをノックする。私が顔をあげると、自分の顔を指差した。中に入っていいかと聞いているのだろう。仕方なく、私は頷いた。田

原がキャビンのガラス戸を開けて中に入ってきたとき、かすかに酒の匂いがして、彼が酔っているのがわかった。
「おはよう」
抑揚のない調子で田原が言い、おはようございます、と私は振り返らずに答える。
「毎日、時刻には正確だね」
「仕事ですから」
「仲本さんのため？」
私は机の上の記録用紙を脇に片づけ、ゆっくりと長身の田原を振り返った。
「何をおっしゃりたいんですか？」
「いや、何をってこともないけどさ。余計なことかもしれないけど、いつまでも助手やってもしょうがないだろう」
「自分で選んだことですから」
「自分で？　ほんとにそうなのかな。まあ、いいさ。関係ないかもしれないけど、俺は今年で大学やめようと思ってんだよ。こんな時代でも、もっとまともな仕事はいくらでもあるはずだから。そういや仲本さんてさ、不能なんだぜ。知ってた？」
私は彼を見上げ、だが何かを言い返す気にもなれずに、目を伏せた。

サーモスタットのファンの音が、大きく響きだす。
田原は点検するようにバットを重ねた棚を覗き込みながら、私の方へ近づいてくる。パイプ椅子を音をたてて引き、身体を投げ出すように腰かけた。
「だから動物とばっかりしゃべっているんだよ」
私は田原の目を見返しながら、言う。
「動物と会話してるなんて、私はむしろ尊敬しますけど」
私の担当教官の仲本茂夫は、天敵学を研究している。植物性のダニを、農薬を使わず天敵のダニで退治する「生物農薬」の研究を、もう三十年近くも続けていることになる。
極端に無口で、視線の方向が左右微妙に異なっており、虚ろに映る。家庭を持たず、研究室に寝泊まりすることが多く、白衣はいつもほころび汚れている。他人とコミュニケーションを持つ意志のない人間のようにも見えた。その人づき合いの悪さから、学内では不当な評価を与えられ、もう十年以上も助教授のままだった。だが、ダニという対象動物の珍しさとその謎の多いキャラクターから、近頃では彼の門下を目指す学生は増えていた。そんな状況を仲本本人がどう思っているのか、私は知らない。知らなくてよいことなのだと思っている。だが、この頃私はそうした自分の役割を、たまらなく歯痒く感じることがある。仲本のようなおよそ実用的ではない人間が、なぜ天敵学のような実用本位の狭い領

域にとどまっているのかということに、強く疑問を抱くようにもなってきた。
田原はテーブルを叩き、それからひとつ溜め息をつくと静かな調子で言った。
「だったら、彼はなんで天敵学なんかやるんだ？　金が欲しいからじゃないのか。いや、それならそれでまだいいさ。君にも恩恵ってものがあるからね。だけど、何なんだ？　君だってよくわからないんだろう。なんであれほど天敵の研究なんかに打ち込めるんだよ。君は、そんなわけのわからないことを、一緒に背負ってやる必要なんかないんだよ。なあ、週末付き合えよ」
「田原さんも、お酒を飲まなければいい研究ができる人なのに」
田原は両手を膝の上にのせ、深々と息を吐いた。
「俺はね、君が思っているほどニヒリストではないつもりだよ。俺は……君があんな男に飼い殺しにされるのを見ていられないだけだよ。もしもやるんなら、来年大学院へ入り直せばいいじゃないか」
「さっきも言いましたけれど、私が選んだことですから」
田原は二、三度深々と頷くと、立ち上がった。出口のほうへ歩いていきながら、
「君は不思議な子だね。俺のような男の理解を超えているよ。しかしさ、まったく厄介なことに、俺は自分の理解を超えた人間がいるってことに我慢ならない質でさ。なあ、ダニ

の採集に付き合ってやるよ」

「田原さん、しっかりしてください」

思わず、私はそう言ってしまう。田原はキャビンの透明なドアを開ける。

「しっかりしろ？　ありがたいお言葉だね。まったく、絶望的に感動するよ。鳥ばっかり見てるとね、一か月も二か月も海鳥ばっかり見てると、俺は取り返しがつかないくらい人間が嫌いになってしまいそうなのさ。まったく君は愛らしく、優しく、美しく、だが愚かだ。俺の言う意味がわかるようになったら、電話しろ。いつかわかるさ。目を覚まして、俺に電話するんだ。いいな？」

田原は出て行った。私は再び机に向かう。キャビンの外から、田原の声だけが聞こえてきた。

……そうさ、田原啓治、しっかりしろ……。

学部を卒業する年、私は郷里の札幌市内の製薬会社に就職することが決まっていた。高校生の頃から付き合っていて、同じように東京の大学に進んだボーイフレンドの秀一もまた、札幌の地方銀行に就職が内定していた。

だが、結局私だけが東京に残ることになり、いつしか秀一が、東京に残り続ける私を半

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com